巻頭言

長嘯子と芭蕉

市村正二

水戸の彰考館には木下長嘯子の歌文集「挙白集」がある。写本であるが、刊本とは内容が少々異なっているので貴重な文献となっている。

芭蕉の作品を読むと長嘯或は長嘯隠士という名がでてくるので、白い辛夷の咲き乱れる春の一日、閑寂な徳川邸内の彰考館で長嘯子の「挙白集」を繙いてみた。

元禄四年の芭蕉の嵯峨日記に

長嘯隠士の曰「客は半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふ」と。素堂此言葉を常にあはれぶ。予も又、

うき我をさびしがらせよかんこどり

とは、ある寺に独居て云し句なり。

という文があるが、「挙白集」に「やがて爰を半日とす。客はそのしづかなることを得れば、我はそのしづかなるを失ふに似たれど、おもふどちのかたらひはいかでむなしからん」とあるので、これによったものであることは間違いない。芭蕉も長嘯子と同様、美的な閑寂の境地を執拗に求めて止まなかったのであろうか。

また、其角編の俳諧集「いつを昔」には

鉢たたき聞にとて、翁のやどり申されしに、はちたたきまいらざりければ
　籌こせまねてもみせん鉢叩　　去　来
　明けてまいりたれば
　長嘯の墓もめぐるかはち敲　　翁

という句文がある。この芭蕉の句は本朝文選にある去来の鉢叩辞によると、元禄二年十二月二十五日の早暁、京の去来宅で鉢たたきを聞いた時に詠んだ句であるということになっているが、おそらくその時、芭蕉は「挙白集」の叩鉢記という文、特にその末尾の「鉢たたきあかつきがたの一声は冬の夜さへもなくほととぎす」という一首を念頭において詠んだものであろう。霜夜の明け方の鉢たたきを愛した長嘯子を偲びながら、芭蕉も冬の早暁その声々に沁々耳を傾けたものであろうか。

更に溯って貞享四年の芭蕉の鹿島詣をみると、

　日既に暮かかるほどに、利根川のほとり、ふさといふ所につく。此川にて鮭の網代といふものをたくみて、武江の市にひさぐもの有。よひのほど、其漁家に入てやすらふ。よるのやどなまぐさし。月くまなくはれけるままに、夜舟さしくだしてかじまにいたる。

という文がある。この文中の「よるのやどなまぐさし」は一説には東関紀行の文をふまえたものであるという説もあるが、これも「挙白集」にある「よるのやどなきぐさしとはむべもいひけり」のところをふまえた文であるとみる方が正しいであろう。常陸鹿島の月見にと遙々出かけた芭蕉は、白氏文集を愛誦した長嘯子の風流心を下総国布佐の漁家に来てふと思い浮べたのであろうか。

　このようにみてくると、貞享四年頃から元禄四年頃の芭蕉は長嘯子にかなり傾倒していったことがわかる。

長嘯子は人も知る豊臣秀吉の外甥、前、若狭国小浜六万石の城主、左近衛権少将木下勝

俊であって、関ヶ原の役後は封地を没収され、京東山高台寺に剃髪して隠棲、長嘯子と号して和歌をたのしんでいた隠士である。のち大原小塩山の山荘に移って慶安三年八十一才で没した。判官贔負という言葉もあり、芭蕉も義経のような不運の武将には極めて同情的であったが、長嘯子の場合は嵯峨日記をみてもわかるように、むしろ隠士と称せられる長嘯子の文学に対するみ方に惹かれたのでなかろうか。奥の細道でも芭蕉は福井の門人等裁を隠士と呼んで愛している。

芭蕉も若い頃は貞門の俳人であったが、その貞門の人たちは、この長嘯子の文学観を非難して「難挙白集」を上梓している。それによれば、これまで重んぜられてきた伝統的な歌の学問や歌の作法などを長嘯子が全く無視していることを非難しているのである。中立的立場にたつ「挙白心評」では長嘯子を「長嘯は世をいとふ隠士にて、梅の花をかぎてはうれひ、きくをとりてはゆうぜんたる人にて、おもひあまりぬるときどき、式にもよらず古実にもかかはらずよめる」と評している。また「挙白心評」には彼の語った言葉として「我はうたのみちはしらず、ただこころにおもふことをくちにいひなぐさむばかりなれば、かきとどむることもなく、よしあしきをえらびおもふこともなし」などがとりあげられているが、これらによっても長嘯子の文学観がどのようなものかがうかがえると思う。

考えてみると、貞享四年から元録四年頃の芭蕉は、笈の小文の旅や奥の細道の旅をしたり、寂の美を追求した猿蓑のような俳諧集編纂の指導をしたりしていたが、一方このように文学とは美そのものを求める無用の戯れ或は遊びであるとみる歌人の文学観に深く傾倒していたのである。

これらのことを考えてみると、この時代の芭蕉の作品には、例えば紀行随筆文学では前記の二つの紀行文や更科紀行、幻住庵記、嵯峨日記、連句文学では猿蓑のほかに曠野やひさご、発句文学では奥の細道にある名吟をはじめとして四七〇句ほどの発句があるが、こ

れらの芭蕉文学を正しく理解するには、文学が美それ自体を求める無用の戯れや慰みであるとみる芭蕉の目が、これら作品群のなかに潜んでいるのでないかと、一応考慮しながら読んでいく必要があるのでないかと思うのである。